

「ジャポニスム2018」続報 12

少し遡りますが、本号では、2018年12月から2019年2月にかけて開催された、柔道特別講習会と各種シンポジウム・討論会を中心に報告致します。

1

目次

1. JITA-KYOEI PROJECT 「柔道特別講習会」 2~3

「ジャポニスム2018」のスポーツ交流企画として、12月7日(金)から9日(日)までの3日間、パリ、パリ郊外のヴィルボン=シュル=イヴェット、そしてトゥールーズの3カ所で開催されたフランスの柔道指導者たちや青少年を対象にした柔道の特別講習会。

2. 日仏ダイアログ「日本人が見たフランス/フランス人が見た日本」 4~6

大学共同利用機関法人・人間文化研究機構との共催による第3回目のシンポジウム。今回は「ジャポニスム2018」公式企画の一環として、「日本人が見たフランス/フランス人が見た日本」と題して、日仏の研究者たちが芸術、哲学、食文化、社会学など、さまざまなテーマで発表を行い、活発な議論を交わしました。

3. 日仏文学シンポジウム 7

全体のディレクションはパリ在住の直木賞作家辻仁成さんが行い、日本から林真理子さん、桐野夏生さん、角田光代さんの3人、フランスからステファニー・ジャンコさん、カナダからナンシー・ヒューストンさんが参加して、文学と女性、日仏文学の比較、今後の文学の可能性や国際化等についても議論しました。

4. ポール・クローデル『百扇帖』をめぐる討論会 8~9

生誕150年記念を兼ねて「ジャポニスム2018」公式企画の一環として実施されたクローデルの『百扇帖』をめぐる討論会。比較文化・比較文学の第一人者や第一線で活躍する俳人たちがそれぞれの見解を述べた上で、熱い議論が交わされました。

① JITA-KYOEI PROJECT 「柔道特別講習会」

「ジャポニスム2018」のスポーツ交流企画として、12月7日（金）から9日（日）までの3日間、パリ、パリ郊外のヴィルボン＝シュル＝イヴェット、そしてトゥールーズの3カ所でフランスの柔道指導者たちや青少年を対象にした柔道の特別講習会が開かれました。

筆者は7日（金）にアンスティテュ・デュ・柔道で開催された特別講習会に参加し、フランス柔道連盟のジャン＝リュック・ルーシェ会長、講道館の上村春樹館長に続いて冒頭挨拶をしました。

特別講師に選ばれたのは、同上村春樹館長、同国際部仮屋力課長代理、そして3つのオリンピックで連続金メダルを獲得した野村忠宏7段・(株)Nextend 代表取締役、の3名です。

受講者は総勢320名にのぼりました。それだけの数の有段者が柔道着を着て居並ぶ姿は壮観でした。野村7段と上村館長がそれぞれ背負投と小内刈りなどの技術指導を仮屋6段を相手に披露した後、フランスの選手たちにも技のかけ方等を教授しました。その後、それぞれ一組ずつになり、技を掛け合うなどして、練習しました。最後にチームごとに3人の講師の先生方と写真撮影をして講習会は終了しました。

一流の柔道家の技のキレ味は思わず感嘆の声をあげるほどでしたし、仮屋6段の受け身も見事でした。仮屋6段は野村7段が思い切り技をかけてきたので、受け身をしてきつかったと、あとで笑いながら感想を述べていました。



アンスティテュ・デュ・柔道の道場で行われた柔道特別講習会開会式



飯屋 6 段を相手に背負投の技術指導をする野村 7 段



講習会後の記念撮影

また、年明けの1月19日（土）と20日（日）にはアンスティテュ・デュ・柔道で「鏡開き」がフランス柔道連盟と講道館の共催で実施され、併せて、フランス各地から参集した柔道指導者たちを対象にして、講道館から派遣された柔道専門家による形の披露および指導法の講習会が行われました。

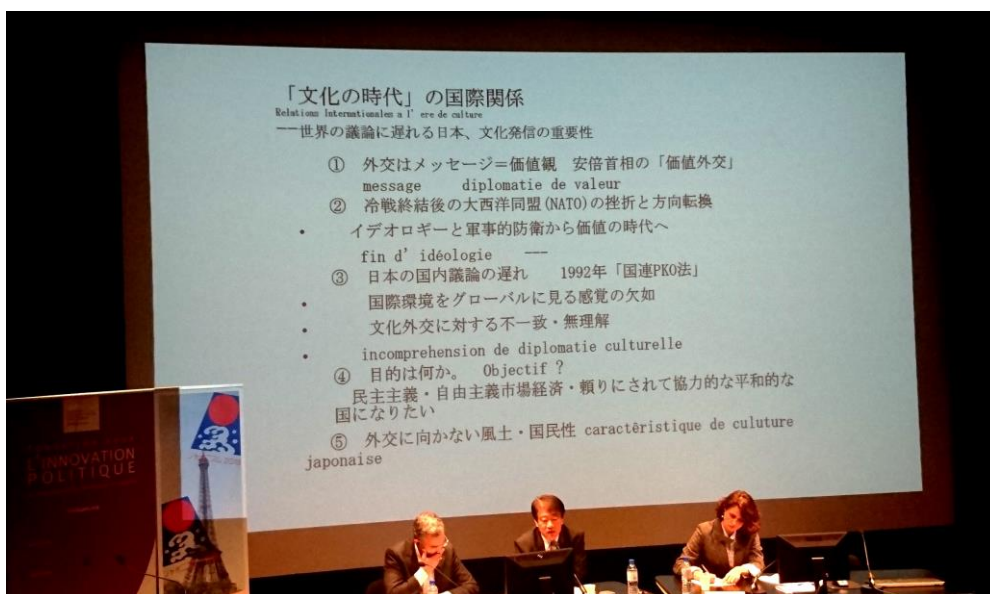
② 日仏ダイアログ「日本人が見たフランス/フランス人が見た日本」

パリ日本文化会館では、2016年10月に大学共同利用機関法人・人間文化研究機構との間で「連携に関する基本協定」を締結しました。同協定は、相互の国際文化交流活動の連携を推進することにより、国際文化交流の発展に貢献することを目的としています。

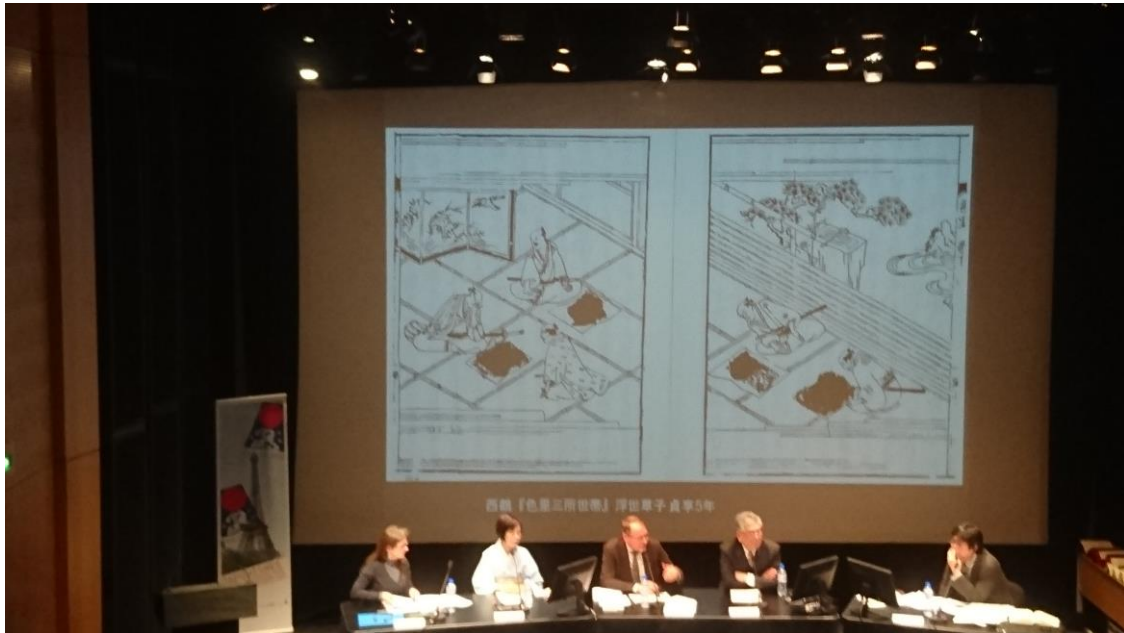
その協定に基づき、2016年10月8日に第1回目のシンポジウム「災厄を生き残るための人知」を開催、2回目は2018年2月6日にアラビアと日本の書を融合したハッサン・マサーディさんと大阪国立民族学博物館のアラビア・ペルシア文学の専門家山中由里子さんによる講演会を開催しました。

第3回目となる今回は1月11日（金）にソルボンヌ大学で、12日（土）にパリ日本文化会館で、「ジャポニスム2018」事業の一環として、大規模なシンポジウムが開催されました。タイトルは「日本人が見たフランス/フランス人が見た日本」で、日仏の研究者たちが芸術、哲学、食文化、社会学など、さまざまなテーマで発表を行い、熱い議論を交わしました。

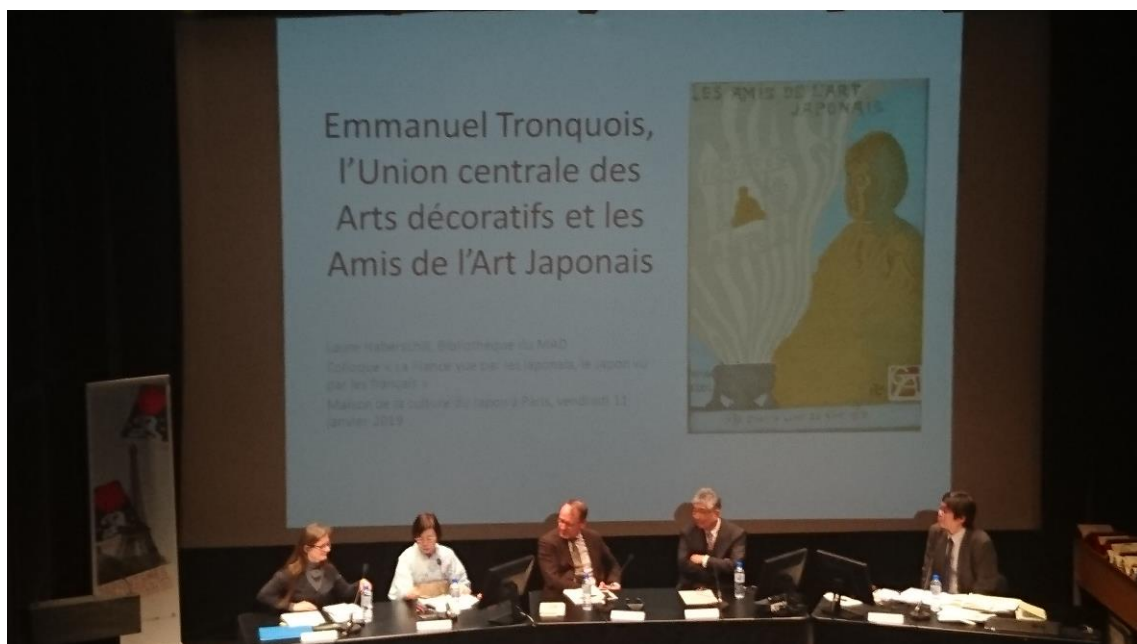
主な発表者は人間文化研究機構の李成市理事のほか、東京外国語大学国際関係研究所の渡邊啓貴所長、国立民族学博物館の食文化の権威・石毛直道名誉教授、大手前大学の柏木隆雄名誉教授とその夫人で京都市立芸術大学の柏木加代子名誉教授、東京女子大学比較文化研究所の和田博文所長、国文学研究資料館の谷川恵一副館長、東京大学情報学環・学際情報学府の吉見俊哉教授、早稲田大学人文科学研究センターの石井香絵招聘研究員、フランス学士院のジャン＝ロベール・ピット倫理・政治学アカデミー終身幹事、フランス国立社会科学高等研究員のオーギュスタン・ベルク教授、フランス国立極東学院のクリストフ・マルケ院長。ソルボンヌ・パリIV大学のドミニーク・ミレ＝ジェラルド教授、フランス国立科学研究センター東アジア研究所のアルノ・ナンター級研究担当官、パリ装飾芸術美術館の文化遺産コレクションのロール・アベルシル司書など、多岐の分野に亘る専門家たちです。



講演会の様子 1



講演会の様子 2



講演会の様子 3

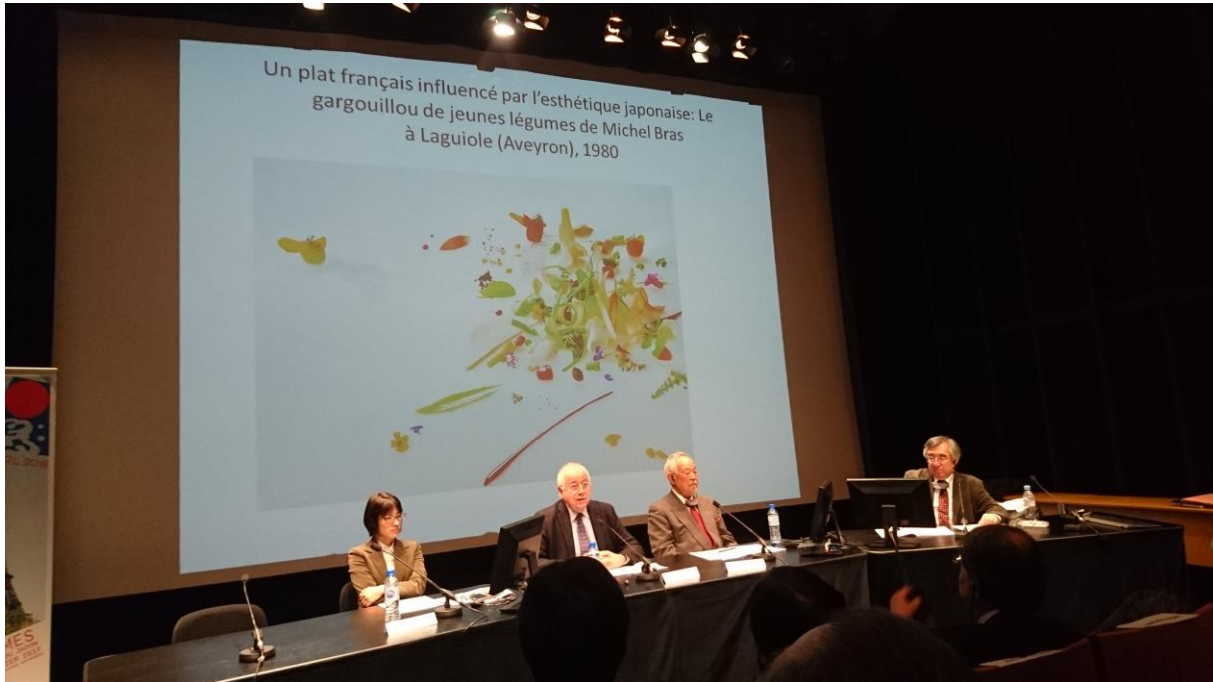
特に筆者が興味を抱いたのは、マルケ院長と柏木加代子名誉教授が発表した「トロンコワの和本コレクション」に関する発表でした。

エマニュエル・トロンコワ（1855-1918）は、日清戦争勃発直前に来日し、13年間の長きにわたって日本に滞在して、膨大な江戸、明治時代の絵画、挿絵本を蒐集したことで注目されています。その数実に約3,400点に上り、19世紀にフランス人によって集められた最大の和古書コレクションとされています。

注記: 本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一の見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。

作成者: 館長 杉浦 勉 t.sugiura@mcjp.fr <https://www.jpff.go.jp/mcjp/member/news.html>

一部は 1921 年の売り立てで散逸したということですが、現在フランスの 4 つの図書館に
分蔵されていて、それらの目録をマルケ氏がこのほど作成、その研究成果を発表しました。
筆者としては、将来、それらを集めた展覧会の可能性を追求したくなりました。



食文化に関する講演の様子 4



講演会最後の総括セッションの様子 5

③ 日仏文学シンポジウム

「ジャポニスム2018」公式企画の一つとして、2019年1月18日(金)16時から現代文学についての日仏文学シンポジウムが開催されました。「文学と女性」を切り口にした日仏の作家たちによるシンポジウムで、日本から林真理子さん、桐野夏生さん、そして角田光代さんの3人の人気作家が参加し、フランスからステファニー・ジャンコさん、カナダからナンシー・ヒューストンさんが参加しました。全体のディレクションはパリ在住の直木賞作家辻仁成さんが行いました。

シンポジウムは3部構成となっており、第1部は辻さんによる開会の辞と趣旨説明があり、その後、ボルドー・モンテーニュ大学准教授のクリスティーヌ・レヴィさんの司会のもと、日本の女性作家たちから見た戦後の文学的道程が議論されました。その中で、日本では女性という理由で女性作家たちが長い間正当に評価されなかったことなど、批判的に語られました。



ベッドフォードホテルで開催された日仏文学シンポジウム(第1部)

第2部は「日仏文学対話」と題して、日仏の人気女性作家たちによる現代文学界の抱える問題や文学における国際交流についての討議・対話を通じ、日仏文学の比較、今後の文学の可能性や国際化等が議論されました。

第3部はシンポジウムの総括と「カクテル」を通じた交流が行われましたが、筆者はパリ日本文化会館での小栗康平監督の映画「Foujita」の上映会前の挨拶があったため、第1部の締め挨拶をしたのち会場を後にし、残念ながら最後まで拝聴できませんでした。しかしながら、林真理子さんご自身が2月7日の週刊文春(54-55頁)でこのシンポジウムについて書かれているので、そちらをご覧くださいと思います。

④ ポール・クローデル『百扇帖』をめぐる討論会

2019年2月5日(火) 18時から20時半まで、「いつも前衛であり続ける古典: ポール・クローデルの『百扇帖』をめぐる考察」と題する討論会がパリ日本文化会館で開催されました。登壇者は比較文化・比較文学の第一人者である芳賀徹東京大学名誉教授、詩人で元米国国務省外交官のアビゲール・フリードマン氏、ブルターニュで子供や一般人向けに俳句普及に努めているアラン・ケルヴェール氏、俳人の夏石番矢氏、比較文化・比較文学者の金子美都子聖心女子大学名誉教授、俳人の恩田侑布子氏の6人でした。筆者は、諸事情によりご参加できなかった中條忍青山学院大学名誉教授(クローデル生誕150年記念企画委員会委員長)の代わりに急遽司会を務めさせて頂きました。

ポール・クローデルは20世紀フランスを代表する詩人・劇作家です。また同時に東西文明各地の現場で活躍した外交官でもありました。昨年はクローデル生誕150年ということで、県立神奈川近代文学館をはじめ、フランスでも3月16、17日のテアトル・オー・マン・ニュでの『繻子の靴』を巡るシンポジウムやアントワーヌ・ヴィテ演出の「繻子の靴」の全編上映会を皮切りに、コンサートや展覧会、朗読会や討論会など、多くの関連催しが開催されました。当館でも昨年9月に渡邊守章先生演出の「繻子の靴」の上映会と講演会を開催しました。そもそも「ジャポニスム2018」の標語「響きあう魂」はポール・クローデルの随筆『日本のこころを訪れる眼』(*Un regard sur l'âme japonaise*)から引用されたものでした。

本討論会は、最初の1時間余りは6人の登壇者が『百扇帖』全172篇の中から、それぞれ原詩をいくつか選別し、それらの詩の鑑賞と見解を10分程度述べていただき、その後、自由討論に入るといった形式をとりました。

芳賀先生は『百扇帖』の序文から始めて、119番の富士の句、61番の金の矢の句、132番の琴に似た日本列島の句、69番の初めの帝の句などを引用しながら、クローデルによる日本列島の神話的ヴィジョンについて滔々と見解を述べました。その後、芭蕉や蕪村の俳句を例に「もののあはれ」についてのクローデルの論評や149番の雨と雪の句、148番の葉の上に葉の影の句、53番の雪と日の光などのクローデルの句について話をする予定でしたが、時間が足りなくなり、その点は後半の討論会に持ち越すことになりました。

続くフリードマンさんは、『百扇帖』60番の山上の句、162番の双翼の句を例にとり、俳諧の形と内容等を、視覚、触覚、書の側面、想像性など総合的に『百扇帖』を評価すべきであると述べました。また、フランスと米国での俳句の受容の違いについても言及しました。

ケルヴェールさんは、『百扇帖』35番の道行く人の句、80番の杜鵑(ホトトギス)の句、89番の白翼の句、162番の双翼の句などを引き合いに出して、『百扇帖』の季節感について見解を述べました。

作成者: 館長 杉浦 勉 t.sugiura@mcjp.fr <https://www.jpff.go.jp/mcjp/member/news.html>

夏石さんは、『百扇帖』30番の白い牡丹の句、131番の黄色と白の花の句、165番のミルクのようにやさしい金の句、67番の湖の両端に現れた朝日と七つ頭の蛇の句、そして172番の日本との離別の句などを引き合いに、クローデルの日本についての印象を、植物、水、太陽という3要素に集約して特徴づけました。そして『百扇帖』172篇の詩は、クローデルが、フランスの本質を再認識しつつ、日本の本質を把握しようと試みたもので、そこに西洋の二元論を乗り越えた新世界が見いだせると結びました。

恩田さんは、『百扇帖』の71番の瀧止まらばの句、93番の瀧の音を聞き、身をさかしまに根源への句、95番の目を閉じて聞く瀧の音の句、149番の雪になる雨、金になる泥の句、171番の神道の鏡の句、などを引用しながら、『百扇帖』の内容と技法、構成、フランス人によって初めて書かれた余白の芸術、北斎マンガとの共通性、時を超えた精神性について語りました。

その後、自由討論に進みましたが、芳賀先生を中心に互いの見解の肯定と否定が熱く交錯、談論風発して、司会者としては時間管理が大変な2時間半でした。



討論会の様子 (写真: MCJP/M. Kojima)

以上